

一九五五年火野葦平の新中国視察記 漢口から武昌、武漢へ

増 田 周 子

はじめに

火野葦平は、一九五五年四月六日から十日にかけて、インドのデリーで開催された「アジア諸国会議」に日本の文化問題代表として参加した。「アジア諸国会議」終了後、会議に参加した日本代表団の一部の二十八名は、一九四九年十月一日に成立した中華人民共和国、すなわち新中国を視察することになる。火野も二十八名の一人として新中国の視察に参加した。

火野らはカルカッタ、ラングーン、バンコク経由で香港に入り一九五五年四月二十日に汽車で深圳から新中国に入国し、二十一日より広東から新中国を視察していく。火野の新中国訪問については、拙稿「一九五五年 火野葦平『アジア諸国会議』参加後―インドから香港、広東へ―」（関西大学『文学論集』二〇一五年九月）、「火野葦平の新中国視察記―広東から、漢口へ」（関西大学『東西学術研究所』二〇一六年、第四十九号）で、四月二十四日までの視察の様相を記した。火野は、一九五五年の漢口の鉄橋工事を見て、「旅のあとをふりかえって⑤」で次のように述べる。

現在、中国政府は揚子江そのものとたたかいつつある。鉄橋架設が計画され、すでに工事に着手して来年は完成

するといふのである。(中略) 昔はこの長江に橋をかけるなどといえ、そんなオトギバナシみたようなことをいうなど嘲笑されたものだが、今そのオトギバナシは現実となつて来年は橋がかかるのである。

中国人が何かの自信を持ちはじめている。中国人のお得意であつた『没法士』(メーファーズ) 仕方ないというあきらめは、いま『有法士』(ユーファーズ) 方法がある、なんでもやればなんとかなる、という前進の姿勢にかわつた。¹⁾

新中国になつて、中国人に自信が漲っている様子を火野は感じ取つていたのである。本稿では、これまで記した新中国訪問記の続きを、火野の撮影した写真や、見聞記、『日記』などを用い、報告していきたい。『日記』については、論者がすでに、翻刻し、明らかにした『中国旅日記』(『東アジア文化交渉研究』二〇一一年二月、第三号) を使用する。『中国旅日記』とは、横9.5cm、縦13.5cmの「MEMORANDUM」と書かれた手帳であり、全一六八頁である。一九五五年四月二十一日から五月四日までの新中国の訪問中の出来事を詳細に綴つた日記風の「メモ」であり、当時の記録として貴重なものである。この日記には、巻末の四月二十一日に次のようにあるので、新中国の視察中は、四班に分かれて行動していたようである。ただし竹中はのちに長安へ行つた。

中国行。班別(4月21日)

1. 泊屋 吉見 松本 安倍^{ママ} 松岡 中村
2. 富永 早坂 松本 近藤 松本 朝田 鈴木。
3. 火野 丹野 永瀬。泉 吉田 和田

4. 竹中 畑中 吉岡 小林

さて、新中国の視察をルポルタージュ風に描いた作品『赤い国の旅人』（一九五五年十二月、朝日新聞社）にも、火野らしき人物が「私」として登場する。もちろん、『赤い国の旅人』は登場人物が偽名ででてきたりするので、完全な事実ばかりではない部分もあるが、この作品のもとになった『中国旅日記』と照合すると、かなり事実に近い部分が多い。そこで、『赤い国の旅人』や当時火野が発信した記事なども考察に使用したいと思う。なお、本稿で使用する写真のほとんどは、火野が撮影し、火野の御三男故玉井史太郎氏が所蔵していたものである。

一、四月二十五日 漢口

四月二十五日、火野は「バスに入らうと思つたら、水。身体を洗つたがふるえあがつた。それでなくても今日は寒い」（『中国旅日記』）と記しているので、大変寒い朝だったようだ。朝食のオカユを食べて、一行は八時半に出発した。市内の道はよいが、郊外に出ると、道が悪く凸凹していた。火野は、「こういう道はなつかしい。天気になれば砂塵がまいあがり、雨が降れば泥沼と化する中国の道路を、十数年前、銃をかついで何年も行軍した思い出。いたるところにある楊柳も回想をそそる」（『赤い国の旅人』一五三頁）という。民家の壁に黒々となお「仁丹」の文字が残っていた。「昔はこの街にも城壁や家の壁に、『仁丹』『老篤眼薬』『大学眼薬』『若素』『味之素』などの広告文字がデカデカと書きだされてあった。そのほとんどは消し去られたが、まれに残っているのである」（『赤い国の旅人』一五三頁）とある。火野は、亀田東伍さんから「日本の仁丹は中国人によくきき大人気だったので、解放後は中国製の人丹というのが製造されて売られだされている」と教えて貰った。火野は、漢口の郊外をバスで移動しながら、次のように



集ってくる多くの子供たち

考えた。

一行の中で何人が昔の中国を知っているのか、私にはまだわからない。副団長の佐倉さんは戦時中の方々にいたらしく、しきりに昔を回顧したり、中国通を發揮したりしていたが、沈黙している連中のなかにも戦時中いた者があるらしい。戦争中、中国にいたということは、占領者たる日本軍の一員として、なにかの任務についていたということだから、下手すると戦犯呼ばわりされる。そういう人は私同様に、現在の中国を歩くことに身のちぢむ思いをしているであろうか。それは個人的内面問題であると同時に、日本人の責任という問題にもつながっている（後略）。

〔赤い国の旅人〕一五三―四頁

火野は、戦時中、中国を侵略した日本兵の一員であったことに負い目を感じ、責任を痛感しながら新中国の視察を続けていたようだ。さて、火野ら一行は、まず「中央人民

政府鉄道部」に行った。ここは機関車工場で、機車車輛修理工廠管理局の「江岸機車車輛修理工廠」を視察する。『中国旅日記』には、「たくさん子供が珍しさうに集つて来る。入口をはいり、機関車工場の騒音の中を抜けて事務所へ行く。」と記している。二階の応接室に通された。ここには、正面に巨大な毛沢東主席肖像画があった。火野は、次のように記す。



「江岸機車車輛修理工廠」二階の応接室

中国政府は各国のさまざまな団体を招待すると、視察のスケジュールを作り、そのプランにしたがつて案内するので、もはや順序や様式がちゃんと紋切り型にととのっているようである。ここでも型どおり、所長からひと通り工場の歴史、概況説明があった後、工場見学という段取りになる。

（『赤い国の旅人』一五四頁）

ここで、火野らは、一九二二年に、この江岸機車工場で起こった「二七

事件」というストライキの話を聞く。火野の『中国旅日記』には、次のように記してある。

○ 二七大ストライキ——京漢線の労働者は帝国主義者と白人の統制下で四十八年間も苦しんだ。1923年、中共の指導の下に、11月15日（？）2月1日組合結成、総工会、超軽玄（欽短方）その他が呉佩孚に鎮圧を依頼した。1月28日、定州で会議、全体長官が禁止、軍から岳陽へ来いといふ命令、圧力で定州会議を（文献によつてしらべること）禁止したが、定州で1月27日、会議を開いた。2月1日呉佩孚、軍隊で会場包囲したが武器を持たずに入り込み総工会を成立させた。労働省に不買、不宿の命出した。自由民権を守るため工場にかへり、2月4日ストライキに入る。1日から7日まで、デモ、対抗圧力排除、7日午後5時、1千名の軍隊（二営）漢口労働組合分会包囲、流血、32名死、100負傷、大勢を拉致、仕事をしろと威嚇、指導者を斬り。群集に発砲、林祥謙殺さる。（「二七」は二月七日 惨夢の日。）

この「二七事件」というストライキは、火野の日記や『赤い国の旅人』の記述によると次のようなことだ。「京漢線の労働者は帝国主義者と白人の統制下にみじめな生活をつづけ、四十八年間も苦しんだ。」そして、「一九二三年に中国共産党の指導下にはじめて組合が結成されたので、鉄道長官超軽玄は呉佩孚將軍その他に鎮圧を依頼した」。

二月一日、定州で会議をひらいていた労働者たちを軍隊が包囲したが、なんらの武器も持たぬ労働者たちは屈せず総工会を成立させた。二月四日からストライキ、七日午後五時、一千名の軍隊が漢口労働組合分会を襲撃し、死者三十八名、負傷者百名を出し、大勢を拉致した。軍隊は群衆にむかつて発砲し、遂に指導者林祥謙を殺し

た。

『赤い国の旅人』一五五頁

火野らは、話を聞くだけでなく、この二七ストライキに加わった闘志の生き残りの二人、張士漢さんと呉東山さんに会った。火野は、「張士漢さんと呉東山さんの二人、当時の二七ストに参加した工具。みんな拍手して迎へる。よいオツさん。」（『中国旅日記』）と記している。張士漢さんと呉東山さんはこんな様子だった。

感動した常久さんがしきりに握手すると、てれくさそうに、しかし満更うれしくなくてもなさそうな様子をしていた。老闘士の間にはさまった常久さんは両手を二人の肩にかけて写真をとった。そして、呉君の通訳で、二人に話しかけた。

「われわれ日本の労働者も、あなたがたの輝しい勝利の記録にならって、資本主義や帝国主義とたたかいます。どんな困難があってもかならず革命を成就させる決心です。どうぞ、お二人とも最後まで長生きして、日本の革命を見て下さい」

『赤い国の旅人』一五五頁

また、『中国旅日記』には、「中の写真はいけないといはれてゐたが老闘士をうつすことは許可される。照れくさうな張さんと呉さん。みんなが寄つてたかつてうつしたりいっしょにうつたり、大人気。をかしさうにうれしさうにしづかな笑みをたたへる。」と記していた。その他、火野ら一行は、この江岸機関車工場で以下のような話を聞いた。



二七事件の生き残り—張さんと吳さん



日本代表団と張さん、吳さん

○解放後、1949年は1ヶ月四台修理しかできなかったが今年は10台できる。毎年、国家計画を完成、先進的労働者85名、大洪水と戦った45名の模範工員。1953～54年に賞をもらった。

○生活 解放後初期から80%上昇、労働保険労働保護 1951—旧幣1万9千円（もと1億9千、今は13億）、1954—貨幣13万円（1年間）

○生産奨励 合理化奨励、競争奨励、等。

○文化班、技術班、政治班、事業班、四つ。文藝活動——毎週、映画、ダンス、劇。スポーツ（毎日）宿舎、風呂場、その他厚生設備。五・一メーデーと台湾解放のため、生産精励。——などの話。（中略）

○工場見学。機関車、しきりに汽笛を鳴らしてゐる。ごうごうたる工場内で、熱心にはたらく人達。

○ハリ紙「反対嬌傲自満敵情緒、云々」（後略）

○スエーデン、その他東欧の機械類の中に、日本のものも点々とある。住友、その他。

（『中国旅日記』）

ここで、火野らが見た「『反対嬌傲自満敵情緒』、云々」という張り紙に、反応した日本人もいて、「赤い国の労働者だからといって思想堅固な者ばかりでもないんだね」（『赤い国の旅人』）と言った。すると、通訳の蘇琦さんが「大勢の工員のなかには意識が低くて、革命の意義を解しない者もあります。それで業余学習を徹底的にやって思想改造するよう努めています」（『赤い国の旅人』）と述べた。新中国の人民たちも、同じ革命思想を持っているわけではないことが伝わる。さて、その後、火野らは、「バスで工場を出て、街に行く。中国鉄路工会漢口分区委員会」（『中国旅日記』）に行った。二七ストライキに加わった張士漢さんと呉東山さんも火野ら一行に加わった。その後、「工人俱樂部」に行きそして二七事件記念館に入った。そこは、「中国鉄路工人『二七』臨岸史画数十枚の写真と絵。生々し

い闘争の跡。」(『中国旅日記』) があり、次のように記している。

○入口に「二七老工人休息室」とかいてある。老闘士の張さんと呉さんが説明をしてくれる。今はどんな役目をしてゐるのであらうか。好々爺である。八幡製鉄にゐる宿老のやうなものかも知れない。

○江岸駅。二七事件記念の地。構内には石炭がたくさん貯蓄してある。アンペラ小屋にゐる中国人たち。線路わきに、なんの標識もしてない林祥謙の殺された場所がある。解放後、二七ストを弾圧、発砲した元兇を、人民裁判にかけ、同じこの場所で銃殺したとのこと。構内のいたるところにある貼り紙、すべて建設意慾をかきたてるもの。

(『中国旅日記』)

火野らは、二七事件記念館を出て、江岸駅を訪れた。そこには、「貯炭の山が構内に積みあげられ、付近は貧民街で、アンペラ小屋のなかに苦力のような男たちがいた」(『赤い国の旅人』一五七頁)。ここで、二七事件の指導者林祥謙が殺され、また、解放後には、この二七ストを弾圧し発砲した者をこの場所で銃殺したという。火野は『中国旅日記』に記したことをふまえ、以下のように述べている。

その敵味方二人の血で彩られたという場所は、ありふれた黒い土の地面であつて、なんの標識もしてない。(中略) 革命は血で血をあがなうものだとかわかっていても、殺した男を殺された男と同じ場所にわざわざつれて来て殺すというむざんさが、輝かしい勝利の記録だということは奇怪な戦慄をおぼえた。私は長くその血の場所を見ているに耐えられなかつた。

(『赤い国の旅人』一五八頁)

火野は、革命により樹立した新中国の様相に、疑義を抱いている。政府が変わったからと言って、昔の善がいきなり悪になり、すぐに処刑するといった方針に疑問を感じたのであろう。新中国を視察しながら、冷静に、客観視して判断しているのである。その後、帰路につき「反对巴黎協定武装西独、反对復活日本軍国主義」（駅構内の小屋の壁にはつてあつたポスターの文句）の貼つてある、駅前の柵の根の根の小屋を見る。「附近の家は貧しく、大勢の子供たち珍しさうに出て来る。」（『中国旅日記』）そして、昼食をとつた。それから、午後はスポーツ見学をするために、人民体育場を訪れた。新設されたばかりの人民体育場は次のように記している。

○人民体育場（立派）へんぼんたる旗の列。「向捷克斯洛伐克共和国保加利亚人民共和国運動員致敬！」

○2時 入場式。拍手。中国、ブルガリヤ、チェッコスロバキヤ三国選手。小さい中国選手。青ビロード服、チェッコだけ、エビ茶服。

○挨拶。女の子たち、花束を客の選手団に贈呈、選手たち一人一人、観覧席へ花を投げこむ。選手退場する。ボールを立て、網を張つて、試合場を作る。せまい感じ。はじまつて見ると一組6人（普通は9人）簡易化されたのかも知れない。（『中国旅日記』）

この人民体育場では、中国、ブルガリヤ、チェッコスロバキヤ三国の女性選手たちがバレーボールの試合をしていた。試合を観戦し、次のように、『中国旅日記』に記している。

◎保加利亚 対 武漢連隊

○どちらも女選手。ブルガリヤの女選手のたくましい身体、試合服になると、ストリツプみたいである。気の毒なほど、小さい中国選手、健斗したけれども、問題にならぬ。スマツシユするのに、ネットの高さが決定的。5回勝負、三回ストレートでまける。

○捷克斯洛伐 軍隊中央之案 克対 武漢連隊

15 × 2 15 × 1 15 × 4 (これハストレートで中国の負け)

(『中国旅日記』)

この記述によると、中国選手達は、身体がブルガリヤの選手よりも小さく、試合に完敗したようである。「中国選手もなかなか上手であるがなんといつても体力の差は仕方がない。どちらも兵隊。まだ試合があるらしかったが、かへることにする。」(『中国旅日記』) なども記していた。「曇り空から雨がパラパラ、寒」くなり、帰ることにした。また、火野は、「漢口の街が道路がきれいになつてゐるのにはおどろいたが、なんだか全体に活気がなく、街は色彩を失つて荒廃してゐる印象がした。そんな筈はないから、錯覚であらう。」(『中国旅日記』)とも記している。ホテルに戻り、予定は、五時だったようだが、六時から、休憩室にて会議を行った。会議の様相をメモした部分は次の通りである。

○全体会議(6時。) 5時半からがやつぱり30分おくれる。

○予定が一日延びること。連結する一等寝台車が明日都合つかぬため。漢口出発は27日。

○和田さん、全員が平和委員といふことにした方が北京に行つてから都合がよいと提案したが保留。畑中さんは、できるだけ各人詳しく肩書や平和運動のことをかいたがよいといふ。こつちは「作家」とだけ。

一行は中国訪問団二十八名のうち、全てを北京に入る前に日本平和委員の会員としておいた方がいいと和田さんから提案があったが保留したとのことであった。また、畑中さんが、できるだけ一行の身分や肩書を詳しく書いておいた方がいいと提案した。『赤い国の旅人』によると、火野はこの提案に不賛成で、また「もうわかっているよという者もあったが」、「賛同者が多く議決された」という。また、火野も「不賛成であったけれども、口に出して反対は唱えなかった。紙が廻ってきたら、ただ『作家』とだけ書いて、余計なことはなにも書くまいと心に定めたからである」と記している。火野は、詳しく経歴を書けば、戦争に加担していた作家ということを書かねばならずつていたようだ。夜は、「漢口平和委員会の招待」で、宴会が行われ、豪華料理がふるまわれた。平和委員会書記長の杜子方氏が挨拶し、次のように述べた。

新中国を視察されたら、どうぞ率直な意見をきかせてもらいたい、美点をほめるだけでなく欠点を指摘されることが望ましい、わが国はまだ再出発したばかりだから不十分な点、あやまった点がたくさんあるにちがいない、われわれは遠慮のない批判を歓迎すると述べた。

（『赤い国の旅人』一六一頁）

中国側も、制限するのではなく、外国人からも率直な意見を求めているようだ。欠点を指摘されることにも躊躇することはなかったようである。宴会が終わってから、火野は、坂本さんとぶらりと街に出た。「まだ十時にはならないのに、ほとんどの店がしめている。しかし、どういうわけか人通りは多く、暗く黒い街に紺色の服の男や女が奇妙

に忙しげな足どりで往来していた。影絵の街のようである」(『赤い国の旅人』)。

二人でどんどん夜の巷を行くと、漢口駅前に出た。道路のわきの暗いところに百数十人、中国人たちが群をなしてうずくまり、汽車の時間を待っていた。ボロホロの人力車^{ヤンチャ}が駅前にスラリとならんでいるのを奇妙に思ったが、人間のをせる車はなかった。

(『赤い国の旅人』一六二頁)

この後、江漢飯店に帰ると、二次会をしていた。総勢十人くらいが参加し、ダンスをしたり、歌を歌ったり、ヴァイオリンを弾いたり、賑やかだった。火野は、「なぜか私はしつくりとこの狂躁の空気のなかにとけこめず、ビールの味も苦かったが、逃げだすこともできず、ヴァイオリンを借りて、『春雨』や『越後獅子』などをマンドリン風に爪弾きしてみたりした。(中略)感情のわだかまりがこういう楽しさのなかにほぐれて行くとすれば、収穫としなければならぬけれども、ただ酒のうへのオポチュニズムだけなら、かえって結果は面白くない。新中国に入ってから奇妙な圧迫感、息づまるほどの緊張感が期せずしてもとめた吐け口であったとすれば、いっそうたあいが無いわけである。けれどもそんなにむずかしく考えず、友情の新しい芽生えとする方がおたがいのためであるのかも知れなかった。」(『赤い国の旅人』一六三頁)と述べ、新中国での違和感や、一緒に滞在している日本人たちとも心から打ち解けることのできない様子を記している。火野は、オポチュニズムに関しては、他の作品でもずっと批判し続けている。⁽²⁾特に戦後は、価値観が急激に変化し、日和見主義者が多くあらわれ、火野はそのことに対しては懐疑的だった。

二、四月二十六日 漢口から武昌へ

この日は「雨降つてゐる。熱湯が出るのでバスに入る。○航空便が出せるとのこと。封書54銭（フツウ22銭）ハガキ45銭（フツウ13銭）。原稿送らうと思ふけれども書く間がない。約束少しも実行できず閉口。」（『中国旅日記』）と記している。「新中国では郵便物は検閲される。事前検閲はないが、封書などは開封されることが多く、日本にとどくかどうかわからない。これまでも前例がある。そんな話をきかされていたので、着く先々で故国へ便りをする癖のある私も今日まで遠慮していた。（中略）しかし、蘇琦さんが、どこにでも郵便は自由に出せますよというので、はじめて十枚ほどの絵ハガキと、二通の手紙を書いた」（『赤い国の旅人』）という。

手紙を出した後、雨の中を江岸駅に行った。

○江岸につく。雨の中でせつせと堤防工事に働いてゐる労働者たち。煉瓦を積んだり運んだりする女仲仕。雨期までに完成を急いでゐるのであらう。

○揚子江を渡る。黄色い水、茶色っぽい空、海のやうに煙るひろい川。小蒸気船、ロシヤ人が乗つてゐる。

ロシヤ語を勉強してゐる富永君、畑中君は話せると見えて、この船の日本人はアジア諸国会議に出席した代表だなどと説明してゐる。にぎやかな談笑。まもなく武昌につく。四台の自動車とバス。

どんどん郊外へ行く。悪い道、汚い家、貧しい中国人、豚、水牛。田圃のいたるところにある土饅頭の墓。武漢大学の前を通りすぎる。バスは「革命廢殘軍人療養院」のもの。（『中国旅日記』）

江岸駅では、堤防工事が行われており、労働者がせつせと働いていた。「飛浦号」という船で揚子江を渡り、渡船にはロシア人技師が数人乗っていた。武昌棧橋に着くと、四台のハイヤーとバスとに分乗し、郊外にでた。火野らの乗ったバスは「革命廢殘軍人療養院」と記されていた。通路に汚い家が並び、貧し気な中国人と豚や水牛が見えた。また、田圃のいたるところに土饅頭の墓が並んでいた。武漢大学の前を通り華中工科大学にたどり着いた。「ひろびろとした荒野の中に立つ新築中の学校。」（『中国旅日記』）だった。応接室に通され、教務主任からこの大学についての説明を聞いた。

○1953年完成、国家第一次五ヶ年計画にもとづく。工業建設人材養成、武漢、湖南、南昌、廣西の四大学の機械学、電気学科から成り立ったもの。

○昔は卒業200名位、解放後、今年は1000名位卒業。建設と教育、荒野原に近代建築、（中略）バラックで勉強してゐた。まだ周囲の道路などわるい。ホソーなし。四学科、十三科目。学費無料一切国家負担。

①機械製造科（1400名学生 専攻4年専修2年）

②内機械、自動車学科（800名 専攻4年専修2年）

③電力学科（1000名 専攻4年、専修2年）

④動力学科400名 水力、火力 4年

夏休み頃、二つの専攻科が設けられる。

○政治経済学もやる。

（『中国旅日記』）

この華中工科大学は、国家第一次五ヶ年計画にもとづき、工業建設人材養成を目的とし一九五三年に完成した。昔は二百名くらいしか卒業生がいなかったが、解放後は千名の卒業生を輩出した。学費その他はすべて無料で国家が負担している。「労働者農民の学生を養成するため、労働速成中学」（『中国旅日記』）が付属されているという。さらに『日記』には次のようにある。

○地形―喻家山、武昌から17キロ、三平方キロ、東西2キロ、南北1キロ、一年半前まで荒野、107棟、94000平方m、三つの教室回廊、四棟の実験室。一棟の工場、宿舍、将来12万平方m。

○卒業生は一人のこらず国家の建設陣へ。就職運動などの心配はない。ひたすら技術錬磨。武漢大学26年間に建てたものよりも大きい、発表中、9年未完成するもの三分、一通らず。欠点たくさんあるので、意見を聞かせて欲しい。（拍手）
（『中国旅日記』）

華中工科大学の地形は、武昌から17キロの喻家山にあり、9万4千平方mの敷地面積があつたが、将来は12万平方mに拡張される予定だそうである。武漢大学よりも大きい。「労働者農民の学生を養成するため、労働速成中学」が付属されているというが、労働者農民の子弟は、全学生の15%程度であつた。あとは、「民族ブルジョワジー、地主、資本家、商人」らの子弟であつた。（『赤い国の旅人』）火野らは学校内を見学した。学校内は次のように『日記』に記している。

○学校内見学。実習工場へ行く。きこえて来るモーターやベルトの音。

鍛工車間―かじや

○鍛工車間―(車間―現場)

○鉗工車間　たくさんの機械、モーター　小さい女学生、大きなキカイ。アメリカのキカイ、カナダのもある。
国産もある。

○模工車間　一年生実験、木工

○鑄工車間　一原始的ヤリカタ（またバスで、雨の中を）

○図書館。規模の大きなもの、四階建て、建設中、赤土の泥だらけ靴でみんなあがる。ミガキだしをしてきれいな階段や床にみんなあがるので職人、妙な顔してゐる。バスへ。
〔中国旅日記〕

また火野は、学校を視察し、このように記している。

小さな女学生が大きな機械にとり組んで、熱心に仕事をやっている。就職難など全然なく、自分たちの修熟した技術がそのまま国家建設に役立つという希望にうらづけられた学生たちの表情は明るい。こういう若々しい学生たちを見ると、中国の将来の躍進がはつきりと証明されているようで、不安な日本の学生と対比され、暗澹とした気持ちにおちいることを避けられなかった。
〔赤い国の旅人〕一六八頁

華中工科大学の視察は、生き生きとした女子学生の顔つきなどを見て、おおむね良い印象だったようである。中国の躍進が証明され、日本と対比して、暗澹とした気持ちになっている。さて、雨の中、車に乗車し東湖に向かって出

発。午後一時に東湖に到着した。東湖の旗亭で昼食をとり、武漢大学を視察した。武漢大学の視察の様子は、『日記』に以下のようにある。

○武漢大学（三時）

○漢德培（教務主任？ 法律）

○唐東彌（歴史、中国近代学）

（中略）

○（蘇琦さん通訳）話―前身は国家武昌師範、1913年成立、その後、武昌師範大学、中山大学、1928年
はじめて武漢大学の名。1949年5月、解放後人民大学、改革、1951年、政治学習、52年から学部、学課
の調整、工学部、医学部、農学部を独立、中国語文学、ロシヤ文学、歴史、経済、法律、物理、化学、生物、四
年卒業、図書館学は2年、来年から三年になる。教研組36、教員320名、教授87、副39、講師教員61、助教授
133人。学生、解放前1000、現在2400名、解放前は地主、官僚、ブルジョアジー、今は労働者農民職
員の子弟、33%を占めてゐる。（後略）

○附属労働速成中学、卒業後大学へ。生徒300名。附属小学校700名。改革に当つて困難、教員不足、テキ
スト不充分、新教学方法に馴れてゐない。積極的に努力、克服の意慾、発展が早く、建築物不足、新校舎241
494、6平方m、（寄宿舎を含む）
（『中国旅日記』）

広い応接室で、漢德培らから説明を受けた。一九二八年から武漢大学という名で呼ばれるようになったが、前身は

一九一三年の国立武昌師範であつた。一九四九年五月の解放後、人民大学として課の調整を図り、今では武漢大学は、工学部、医学部、農学部を独立、現在は中国語文学、ロシア文学、歴史、経済、法律、物理、化学、生物等の学科がある。学生数も現在は2400名で、解放前は地主、官僚、ブルジョアジーの子弟ばかりだったが、今は労働者農民職員の子弟が33%を占めているという。改革は、教員不足、テキスト不足などで混乱を極めたが、「一時的で、積極的にこれを克服、現在は教育も軌道に乗ったばかりではなく、社会政治的運動にも参加、土地改革にあたっては三百名の学生が農村に出かけて行き、封建性とたたかった」（『赤い国の旅人』一七〇頁）という。「1954年夏、武漢洪水のときも参加。洪水突貫20988回、99人功績を立てた。文化活動、人格養成、人民奉仕の崇高な品質、健康。学生無料、貧学生には手当。卒業後、政府の必要、個人の希望にもとづき適当な職場へ。解放後3130名卒業」（『中国旅日記』）。

その後、火野らは、すぐ前の図書館を見学した。「26万しかなかったが、今は52万冊」（『中国旅日記』）の蔵書がある。「中国雑誌類に一冊だけまじつてゐる『文学の友』（『中国旅日記』）とあり、日本の雑誌があつた。次は標本室を見に行った。標本室のことは、『日記』にこのようにメモしている。

○ 鱒魚。（48尺位）アメリカ、ミシシッピ州に住むのが居る。揚子江。洪水白鯨（上海—湖北）

○ 学生が集めたといふたくさんの標本。物理学や化学教室、実験室。（『中国旅日記』）

火野は、「物理学、化学教室、実験室などを廻る。こういう設備はちやちなもので、日本の大学の方がずっとすぐれている。どうかすると日本の高等学校の方がすすんでいるかも知れない。どの部屋にもロシア語の参考書があっ

て、新中国がソ連一辺倒であることがわかる」（『赤い国の旅人』）と記している。常に日本と比較していることがわかる。その後外に出ると、まだ雨が降っていた。「帰る石段の上で蘇さんに、ここは武昌からどちの方角に当てるんですときくと、蘇嬢、そばにゐた学生にきく。笑いながら『答がふるつてますよ。こつちから太陽がさがり、こつちに沈みます。武昌は太陽は沈む方、ですつて』」（『中国旅日記』）と答えたそうだ。この意味は、「毛沢東主席のように、太陽がさがり、こつち側に、蒋介石のように、太陽が沈みます。武昌は太陽の沈む方」（『赤い国の旅人』）ということらしい。さて、通訳の蘇琦さんは、「疲れたのか、彼女の顔が青い。すこし重労働だ。」とも『日記』に記している。火野は、蘇琦さんを見ながら次のように考えた。

深圳ではじめて会ったときより、痩せたように思われる。疲れているのにちがいない。（中略）世話の焼ける日本代表たちの案内は重労働以上のもがあると思像された。（中略）しかし、他の若い工作員たちとともに、私たちの案内を任務とこころ得、同時に、新しい自分の国を示すことにつよい誇りを感じている様子が見られて、その純粋な態度には好感が持たれた。もし彼女らが逆に日本に旅して来たときには、私たち日本人はこんなにもまじりけない誇りをもって、中国の人々にはたしてなにを示したらよからうか。それを考えると、憂鬱にならざるを得なかった。

（『赤い国の旅人』一七二頁）

日本人に比べて、新中国の人々が疲れながらも、意気揚々として、自国の任務に誇りを持っている様を目の当たりにし、少し憂鬱な気分を味わっている。それほど、新中国の人々は、純粋で、熱心で、未来志向であった。さて、高い石段を下りると、「一番下の石段に、五六條、ミミズ型の溝が彫つてある。」（『中国旅日記』）部分が三

段くらい続いていた。その溝についてこのように『日記』にメモしている。

○一番下の石段に、五六條、ミミズ型の溝が彫つてある。1947年6月1日、反帝運動をやる学生を国民党の軍隊が来て襲撃、三人の学生殺された。その血のあとといふ。赤い血の流れるのが見える思ひ。

（『中国旅日記』）

この跡は、一九四七年六月一日、国民党の軍隊が大学を襲撃した時の学生の血のあとだという。（「前略」）学生が帝
国主義反対の運動をやったため、蒋介石が怒って鎮圧にさしむけたのです。しかし、学生隊がスクラム組んでデモを
やり、屈しなかったので、遂に発砲して三人の学生を殺しました。三人の学生英雄はこの段のうえにたおれたので
す。そのときの血のあと」（『赤い国の旅人』一七三頁）である。火野は、「黒く塗られた溝に雨水がたまり、いまも
どす黒い血がながれているように不気味だった」（『赤い国の旅人』）と記している。

その後、「学校側の人たちに別れて出発。学生たちもいつしよにはげしい拍手。もう五時半、渡船場に着いて、揚
子江を渡る。宿にかへつたのは六時半。7時、夕食。どうも腹がはつて食へぬ。」（『中国旅日記』）と書いている。

そして、夜の「8時15分、映画見物に出発」した。見たのは、上海で製作されたという「山間鈴響馬幫來」であつ
た。「雲南にいる苗族が蒋介石の残党によっていじめられているのを中国人民解放軍が救う話」（『赤い国の旅人』）で
あるが、「あまりたわいないのですんでからアツケにとられた。しかし、考へてみれば、これは宣伝啓蒙の映画だか
ら、現在の中国としてはこれでよいのであらう。初歩的すぎるが、観衆は熱狂ししきりに拍手する。かういふ映画ば
かりではあるまい。」（『中国旅日記』）と感想を『日記』に記している。映画が終わると「観衆はまるで消えうせたや



解放電影院



解放電影院

うに迅速にゐなくなつてしまつた。」(『中国旅日記』) そうだ。

映画館を出るとき、秋元さん「タダだろうか」牧之内さん「きまつてるよ。君はもうすこし社会主義を勉強しなきゃいかんよ」「自由党やめるかな」

(『中国旅日記』)



をはずまなければ、なに一つ仕事をしなかつたものである」(『赤い国の旅人』)と記している。新中国は昔とは違い、確実に変化していたのである。

終わりに

本稿では、一九五五年アジア諸国会議に参加した後の火野葦平の訪中のうち、四月二十五日、二十六日の漢口、武昌、武漢視察の様相をまとめてみた。一九五五年は、まだ日本と中国が国交を回復していない時であり、火野の視察

の記録は、当時の新中国を、作家として、一日本人としてどのようにとらえたのかがわかる貴重な記録である。火野は、軍国主義に無理やり従わなければならなかった戦時中のことを振り返り、絶対服従というあやまった考えを捨て去り、戦後は、自身で見たこと、聞いたこと、感じたことを率直に正直に綴ろうと考えていた。こうして記したのが、本稿で使用した『中国旅日記』や『赤い国の旅人』である。火野自身も、『赤い国の旅人』「これを書く間、私はただ正直でありたいと思っていただけだ」⁽³⁾と記している。

火野らは、漢口では、二七ストの生き残りの老人二人に出会うなど貴重な体験をしていた。また、武昌、武漢では華中工科大学や武漢大学を視察し、多くの説明を聞いていた。新中国に批判的な面も赤裸々に描いているが、大学の視察では、国家が学生の就職を世話し、学費も無料などのサポートをしていることなどは好意的にとらえている。また通訳の蘇琦さんの丁寧な説明や、純粋さにも敬意を表していた。新中国の良さも、冷静にとらえていることがわかる。

注

- (1) 火野葦平「旅のあとをふりかえって⑤」(『西日本新聞』一九五五年七月七日)
- (2) 例えば、火野葦平「妖亀伝」(『小説公園』一九五〇年五月)他の作品でオポチュニズム批判をしている。
- (3) 火野葦平「後書」(『赤い国の旅人』一九五五年二月、朝日新聞社)